様式第８号

議　長	副議長	局　長	次　長	係　長	

行　政　視　察　報　告　書

令和５年　１１月　７日

笠 岡 市 議 会 議 長　殿

議員　　真鍋　陽子

下記のとおり行政視察を実施したのでその結果を報告します。

記

行　程　　令和５年１０月２６日(木)　１０：００―１２：００　横浜創英中学・高等学校
(横浜市神奈川区西大口２８番地　０４５－４２１－３１２１)
１４：００―１５：１５　神奈川県教育委員会教育局インクルーシブ教育推進課
(横浜市中区日本大通１　０４５－２１０－１１１１)
１５：４５―１７：４５　明蓬館高等学校 関内 SNEC
(横浜市中区山下町２２３－１　０４５－２２５―８６５７)
令和５年１０月２７日(金)　９：３０―１２：００　川崎市子ども夢パーク・フリースペースえん
(川崎市高津区下作延５－３０－１　０４４－８１１－２００１)
１３：００―１５：００　神奈川県立城郷高等学校
(横浜市神奈川区三枚町３６４－１　０４５－３８２－５２５４)

視察案件	教師の働き方改革、生徒の学び方改革、無学年制授業、合教科授業、高大連携、インクルーシブ教育推進校、教育と福祉と医療の連携に支えられた学びの保障について 校内フリースクール、不登校や引きこもり、子どもたちが直面している問題、子どもたちを取り巻く社会状況や必要な支援、今後の課題について インクルーシブ教育推進校としての実践、見えてきた課題や希望、今後の展開、展望について、校内に設置されたリソースルームについて
期　　日	令和５年１０月２６日(木)～１０月２７日(金)
応対者	別紙名刺のとおり
視察状況	別紙写真のとおり
訪問施設	１０月２６日（木）横浜創英中学・高等学校　神奈川県教育委員会教育局 インクルーシブ教育推進課　明蓬館高等学校・中等部 １０月２７日（金）川崎市子ども夢パーク・フリースペースえん　神奈川県立城郷高等学校
	【視察目的】 日本最先端の教育、インクルーシブ教育、そして子どもにとって安心・安全な居場所について視察を行った。

	＜横浜創英中学・高等学校＞ 公立中学校改革で有名な千代田区立麹町中学校元校長 工藤勇一さんが４年前から校長に着任され、学校改革が進められている。 ・中学１年から３年までの縦割りで授業編成が組まれている無学年授業（現在は数学と英語で行われている）を見学。友達と一緒に勉強しあえるクラス、マインクラフトを利用して英語を学ぶクラス、民間英会話スクールによるクラス。（レベルにより２クラスあり）（民間英会話とマイクラは有料）勉強しないクラスもあり、疲れている子はここで休むことができる。いわゆる一斉指導・一斉授業による普通の授業もあるが、人気はなく、生徒が全く集まらないこともある。見学した日はネイティブの先生が担当する日だったので、10名程が集まり、英語で映画を観ていた。用意されたさまざまな学びの形の中で、生徒はどのように学ぶかを主体的に選ぶことができる。授業時間内であっても、無料クラスであれば行き来できる。 ・群馬県教委と協定を結んで、中学校４校、高校２校をモデルとして学校改革を進めていこうとしている。公立の学校は規制も大きいが働き方改革とともに進めていく事が大切。 ・現在高校のカリキュラムの大改革を予定しており準備中。教師の仕事の中にある無駄をなるべく無くそうとしている。 ・生徒が1600人いれば1600通りのカリキュラムで勉強できるように準備中。 ・大学との連携により、高校３年生では大学での講義受講実績を高校の単位に出来る。
	＜明蓬館高等学校　関内SNEC＞ ・一人一人の個性に寄り添うことで自分らしい高校生活を応援したいと全国に展開されている通信制高等学校。本校は福岡県川崎町。横浜スタジアムそばにあるビルのフロアには、木材を使った明るい内装の空間が広がり、１人で休めるスペースが何か所も設けられている。 ・「困った子ども」は、「困っている子ども」。その困り感をサポートするために教育と医療と福祉がつながることが必要。SNECでは様々な心理検査を活用することで多職種連携を行いながら一人一人にあったサポートをしている。 ・子どもにとって必要なのは指導者ではなく伴走者。 ・ワーク学習だけではなく科目に関連する検定試験、絵や工芸などの作品、スポーツ、ダンスの実技、調べ学習、他の生徒や他校の生徒と共同で取り組んだプロジェクトなど一人一人のテーマに合わせて担任の先生と相談して決めるマイプロ（成果物学習）では、各自の興味から選んだテーマを研究して発表している。 ・個別学習ができるため周囲に必要以上に気を遣わず、自分自身の学習に取り組める。時間割が無く自分で自分のスケジュールを決めることができることが魅力、と在校生から評価されている。先生方のサポートで大学進学を実現できたなど、卒業生からも声が届いている。 ・２０か国以上で翻訳出版され世界中で反響を呼んでいる「自閉症の僕が飛びはねる理由」の著者 東田直樹さんは明蓬館高等学校の姉妹校であるアットマーク国際高校の OB。支援学校中等部に在籍していたが、高校からは支援学校を出たいと願うも断られ続けていた東田さんを受け入れたのが明蓬館高等学校理事長であり校長である日野公三先生。東田さんは高校の学びやスクーリングを通じて多くの人と出会い、大きく成長。高校側も東田さんから発達障がいを持つ生徒の潜在能力の高さや可能性などたくさんの学びを得たとの事。 ・地域の中学校に在籍しながら通うことのできる中等部も開設している。

	<川崎市子ども夢パーク・フリースペースえん> ・両施設を管理運営している NPO 法人フリースペースたまりば理事長 西野博之さんから説明を受けた。 ・２０００年に成立した川崎市子ども権利条例 第２７条「子どもの居場所」を具現化することを目指し２００３年にオープンした川崎市子ども夢パークは、ケガと弁当は自分持ち、「～禁止」のない遊び場、「自分の責任で自由に遊ぶ」を合い言葉に自分の限界にも挑戦できる場所。大人が主導するプログラムや営利を目的とした活動以外なら誰でも利用が可能。図書館建設予定地として市が取得したが放置されていた土地を活用。 ・フリースペースえんは、主として学校の中に居場所をみつけにくい子ども・若者のための公設民営のフリースペース。年齢、国籍、経済的状況、障害のあるなしに関わらず来たいと思う人は誰でも通える場。特徴は「自分で決めるプログラム」一日をどのように過ごすのかは自分で自由に決めることができる。 ・コロナ禍でも子どもの居場所を確保したいと施設を開け続けた。 ・不登校、引きこもりの子ども達に３０年以上関わる中で感じているのは「子どもたちの自己肯定感の低さ」。これは大人が向き合わなければならない大きな課題。 ・社会が劇的に変わっているのに、学校だけが変わっていない。 ・子ども達のとがったところを伸ばす、得意なところに光をあてることが大切。 ・私たち大人に求められているのは、子どもを見守る「肯定的なまなざし」。先生方がそのまなざしを手に入れることができれば学校は変われるが、学校の先生方は外に目を向ける余裕が無い。先生方は既存の学校教育の中でだけではなく、自分を成長させることが必要。学校は校長の裁量が大きい。校長の裁量でできることはいくらでもある。 ・廃校の校庭をプレーパークにするという動きが全国的に出てきている。 ・不登校対策で大切なのは「親の支援」親が孤立しないこと。親が変われば子どもは楽になる。
	<神奈川県教育委員会教育局インクルーシブ推進課> ・共生社会の実現に向けてすべての子どもができるだけ同じ場でともに学び、ともに育つ環境づくりを目指してインクルーシブ教育を推進している。 ・神奈川県では過去１０年間、定員内不合格は出ていない。 ・インクルーシブ教育実践推進校では、知的障がいのある生徒を対象に特別募集を行い、すべての生徒が高校でともに学ぶための取り組みを行っている。 ・現在県内１４校が指定済。実践推進校は令和６年度から１８校となる。 ・特別募集で入学した生徒を含めた在校生全員の学びやすい環境づくりのため、インクルーシブ教育実践推進校では学校生活全般、教科等の学習、相互理解など様々な取り組みを行っている。 ・大人が考えるより子ども達は環境に順応しているよう見受けられる。 ・支援学校から普通学校への受験も可能。 ・支援学級在籍は増加傾向。神奈川県は人口増自治体であるが、県立普通高校は統廃合が必要。一方で支援学校は新設が計画されている。 ・各高校への応募状況は学校によって差が出てきている。 ・小学校、中学校における合理的配慮について、県としての指導は一律には困難で、市町村の教育委員会からの相談に順次応じている。 ・インクルーシブ教育実践校における対象者の中途退学者数については把握していない。

	＜神奈川県立城郷高等学校＞ ・インクルーシブ教育実践推進校において知的障がいのある生徒は部活、委員会、行事などを通して一般募集の生徒と共に充実した学校生活を送ることができる。 ・学習は一般募集の生徒と、場所も内容も同じもの。スクリーン、プロジェクター、ホワイトボードなど教室内に整え、学習面ではティームティーチング、習熟度別学習で学習をサポート、必要に応じてリソースルーム（各学年に一部屋、リラックスできる部屋を設置している）を活用、個別教育計画を作成し活用している。 ・論理表現、CEⅠ・Ⅱ、数学Ⅰ、数学Ⅱ（発展・標準）において習熟度別学習が行われており、クラスには「基礎クラス」「標準クラス」「発展クラス」がある。インクルーシブ特別募集により入学した生徒で、「標準クラス」「発展クラス」で学んでいる生徒もいる。 ・個別教育計画は学期ごとに作成、生徒や保護者にフィードバックできるようにと取り組んでいるが県統一のフォーマットは無く、それぞれ各校の担当者がフォーマットを開発している。現時点では、県として様式統一の検討はしていない。 ・高校という小さな社会での経験の積み重ねにより、卒業後の社会への適応性が身に付く。 ・卒業後は進学や就職など、幅広い選択肢がある。 ・インクルーシブ特別募集で入学後、IQが上がり療育手帳を返す生徒もいる。 ・キャリア教育をどのように進めていくのかは課題。現場任せでは難しい。 ・インクルーシブ教育実践推進校となってから、生徒が落ち着いてきた。優しい生徒が増えてきた。生徒指導案件は激減している。 ・インクルーシブ教育実践推進校となってからは、自分も学びやすい学校なのではと期待して入学してくる一般生徒もいる。
	<考　察> 横浜創英中学・高等学校では、人口が多い時代とは違う教育が求められていることを踏まえ、生徒をコントロール下に置こうとする従来の教育からの脱却を目指す先進的な取り組みが行われていた。 明蓬館高等学校では一人一人の生徒が自分のペースで学ぶことで自分自身を取り戻していくことのできる支援伴走型の教育システムを整えていた。 川崎市子ども夢パーク・フリースペースえんでは、大人たちの過剰な支援が子ども達を苦しめている事、社会は劇的に変わってきているのに、学校だけが変わっていない、今の学校教育における一斉教育、一斉指導はもはや古い教育であり、新しい時代に対応できる新しい教育や子どもの居場所が求められている事、などの話をお聞きした。 神奈川県教育委員会教育局インクルーシブ推進課では、インクルーシブ教育実践推進校における理念についてお聞きする中で、共生社会の実現を目標として、長い目で生徒の成長、発達を捉え、状況に応じて必要な環境や支援を提供されているお話をお聞きした。 インクルーシブ教育実践推進校である神奈川県立城郷高等学校では、障がいのある生徒もない生徒もともに学びあう環境、そして安心・安全な場を保障されたことで障がいのある生徒の知的発達や社会性が伸びるケースがあることなどお聞きした。 ・視察先５か所全てにおいて「全ての子どもが安心できる環境」「全ての子どもが学び方、過ごし方を選択できること」に言及されていた。この考えはこれからの社会に生きる子どもたちの育ちを支える根幹と考えている。市内における小中一貫教育においてはもちろん、就学前である幼児期においても取り入れる必要があると考えている。